

二〇二二年度の活動

概要

史料編纂所は、古代から明治維新期にいたる前近代の日本史料を研究する東京大学の附置研究所である。国内外に所在する史料の調査・収集と分析をおこない、これを日本史の基幹史料集として編纂・公開している。一九〇一年の『大日本史料』『大日本古文書』の刊行以来、史料の性格に応じて新しい書目を加えつつ、約二二〇〇冊を刊行してきた。研究部は、教授一八、兼任教授一、准教授二〇、助教一五、特任助教一、客員教授一から成り、二〇二三年一月一日、あわせて技術部（史料保存技術室）、図書部、事務部を擁している。

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大については、油断できない状況を脱したとはいえないが、本年度の東京大学の活動制限指針は、一貫してレベルA「感染拡大に最大限の配慮をして、研究活動を行うことができる」が適用された。史料調査や研究会・講演会等については、オンラインやハイブリッド方式も併用しつつ、積極的な取り組みが行われた。海外との交流も再開し、コロナ前には及ばないものの、史料調査や外国人研究員の受け入れ等も進めることができた。

史料編纂所は、基幹史料集の編纂・刊行によって前近代日本史研究の基礎を支えるとともに、蓄積した史料情報や研究の成果を幅広く学界・社会・市民に提供・発信する努力を重ねてきた。二〇一〇年からは「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」として活動しており、第四期（二〇二二―二七年度）においては東京大学における唯一の文系拠点となっている。

コロナ禍以来、本所が歴史情報処理システム（SHIPS）から提供する史料情報・歴史情報の有用性・重要性はひろく認知されるようになった。情報基盤等については五年ごとリプレースを実施して、最新・最善の状態を保つ

よう努めている。本年度はデータベースのユーザーインターフェースを刷新し、より親しみやすく利用しやすいスタイルを実現した。

また、二〇二二年末の段階で、閲覧室の端末やWeb上で公開されている史料画像は約二〇二二万件となり、月間平均八六万件のアクセスがあった。三〇種を超える各種データベース（データ総数七二五万件）へのアクセス数もコロナ前（二〇一九年）に比べ一・二倍の年間四七〇万件となった。

二〇一九年一〇月から日本学術振興会（JSPS）の委嘱を受けて実施している人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業は、史料編纂所が人文学唯一の拠点機関として活動している。博物館や資料館、自治体、大名家・公家関係文庫等、多彩な史料所蔵機関と連携して、史料画像のWeb公開を進めている。各種所蔵機関において、史料のデジタル化や公開への要請は高まっているが、それぞれの機関が独自に情報基盤を開発・維持するのはたやすいことではない。本所の情報基盤は、それらの史料情報の保全・公開の拠点として機能することで、わが国の文化・学術資源の継承と普及に寄与している。

史料編纂所の研究者は、個人および各種のプロジェクトによる共同研究など、多様な研究活動に従事し、また、大学での学部・大学院教育への参画、PDや若手・外国人研究者の受け入れを通じ、国際的に通用する日本史研究者の育成にも貢献している。研究所の基幹史料集や、個人・チームによる研究成果（著作）の一部は、東京大学のサイト「東京大学教員の著作を著者自らが語る広場 UTokyo BidhiPara」から紹介されている。

二〇一九年度にIR・広報室を設置し、研究マネージメントの強化を図っている。研究広報活動を積極的に展開し、本所HP・公式Twitterでの広報に加え、プレスリリース・大学本部広報での情報発信を行った。

二〇二二年度は、第四期中期目標期間の初年度にあたる。国際卓越研究大学の公募が開始されるなど、大学や学術をめぐる状況は新しい局面を迎えて

いるが、東京大学の目指すべき指針であるUTokyo Compassに沿って、研究事業を充実させ、組織運営の効率化を進めていく。

【史料集の編纂と出版】

史料編纂所は、古代史料部門、中世史料部門、近世史料部門、古文書・古記録部門、特殊史料部門を置き、部門ごとに担当の基幹史料集を定めている。二～三人のチームを組んで編纂を行い、それぞれ二～三年の周期で編纂・出版を継続し、現在の書目は三〇を超える。

本年度は、次の史料集などの刊行を進めた。

『正倉院文書目録九 統々修四』

『大日本史料 第六編之五十一』

『大日本史料 第七編之三十五』

『大日本史料 第十二編之六十三』

『大日本近世史料 細川家史料之二十八』

『大日本近世史料 市中取締類集 三十二』

『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集 徳禪寺文書之二』

『大日本古文書 幕末外国関係文書 卷之五十四』

『大日本古記録 勘例 下』

『大日本古記録 實躬卿記 十』

現在、編纂を継続しているシリーズとして、このほかに『大日本維新史料』『日本関係海外史料』『日本荘園絵図聚影』などがある。

編纂の成果を、書物の形ではなく、電子的な公開とする試みも行っている。古代史料部門編年第一室が担当する『九世紀編年史料』は、成果公開のプラットフォームとして編年史料(古代)編纂支援資源化データベースMIDORIを構築し、第一期の成果を六月に所内公開、一二月に一般公開した。

また、中世禅籍史料研究プロジェクトは、電子テキストを古記録フルテキストデータベースに搭載しており、本年度は『帰周和尚語録』を所外公開(暫定版全文PDFも公開)した。さらに成果発信の新しい方法として、情報センターと協力し、『策彦周良文集』につき、テキスト構造化の国際標準に準拠したデータをもとにHTMLでデジタルギャラリーから公開した。あ

わせて古記録フルテキストデータベースからも所外公開を予定している。

基幹史料集の編纂事業と並行して、国内外の組織的系統的な史料調査・収集を実施している。コロナ禍のために控えられていた史料調査は、徐々に通常のペースに復している。二〇二二年度の史料探訪のうち、計29件が報告されている。

【画像史料解析センターの活動】

画像史料解析センターは、二〇二二年四月に創立二五周年を迎えた。二〇二二年度は、絵画史料・画像史料・古文書画像の三つの分野において、一三のプロジェクトが研究活動を行った。各プロジェクトが対象とする史料は多岐にわたり、荘園絵図、正倉院宝物図、合戦図屏風、琉球諸島図、肖像画、近世都市図(以上絵画史料分野)、戊辰戦争期摺物、近世近代摺物、古写真(以上画像史料分野)、花押、くずし字、台紙付写真・ガラス乾板、金石文拓本(以上古文書画像分野)などについて研究をおこなっている。

このうち、荘園絵図については、『日本荘園絵図聚影 釈文編 四』(中世三)の刊行にむけて、トレース図の作成・校正とともに、解説原稿・紙面構成図の作成を進めた。また客員教授一名の協力のもと、絵図の詳細な分析および研究をおこなった。古写真については、さまざまな技法についての多角的な研究に取り組んでおり、国内外に所在する古写真の調査や、古典技法・「写真油絵」の復元実験をおこなったほか、谷技術専門職員が国際カンファレンスColour Photography and Film, 2nd edition、および第七回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議にて報告をおこなった。近世都市図に関しては、中世文学会春季大会シンポジウム「中世文学と絵画」にて、藤原准教授が「洛中洛外図屏風の祖型を探る」と題した報告をおこなった。金石文拓本については高野山町石の拓本採取をおこない、また正倉院宝物図については京都大学附属図書館所蔵正倉院宝物図関係史料の画像データを本所図書室端末において公開した。

本所の歴史情報処理システム(SHIPS)上には、上記のほかにも、画像史料に関する多様なデータベースが構築されている。画像やそのメタデータをインターネット上で広く共有するために、他機関のデータベースシステムと

の連携にも積極的に取り組んでいる。それらの機能改善や、コンテンツの追加・変更を日常的に行っており、本年度は、「花押データベース」収載花押データの本所図書端末における検索公開、「肖像情報データベース」の新規データ八二〇〇件の新規公開などを実施した。

本センターでは、研究成果報告および活動記録の場として、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』を発行している。本年度は第九六〇九九号を発行した。本『通信』については、一昨年度から、東京大学学術機関リポジトリにおいて、近刊分のインターネット公開に着手している。本年度もこれを継続し、現在は第八七〇九七号および第五〇号別冊を、同リポジトリにおいて見ることができ（ただし、リポジトリ版では図版割愛のケースあり）。より広い読者への発信を意図したものであるが、精細な画像を制約が少なく掲載できる紙媒体も維持していく方針である。なお、次年度は第一〇〇号の刊行という節目をむかえることから、リポジトリ登録用の第五〇一〇〇号総目次の電子データを準備中である。

【前近代日本史情報国際センターの活動】

前近代日本史情報国際センターは、史料情報集約化ユニット、史料情報資源化ユニット、歴史知識高度利用化ユニットの三研究ユニットと、二〇二〇年に史料情報資源化ユニットのもとに付設した原本史料情報資源化ミニユニットで構成され、研究業務を支える情報支援室と目録室が付属している。二〇二一年からは、FSI事業としてデータ駆動型歴史情報研究基盤の構築プロジェクト（データ駆動型PJ）を開始した。同事業の運用方式の変更により、予算措置は二〇二一年度限りとなったが、研究PJとしては継続し、本年度は歴史知識高度利用化ユニットのもとで実施している。上記のような体制により、本センターが中心となって史料編纂所の歴史情報研究を展開している。

クラウドコンピューティング利用を中核とするシステムとして二〇二一年から稼働している史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）の管理・運用は、情報支援室を中心とした体制で実施しており、二〇二二年六月からはデータベースの新たな公開検索システムの本格稼働を開始した。新たなデータ

ベースとしては、編年史料（古代）編纂支援資源化データベース（DOI: 10.24602/doi）の公開を二月から開始した。原本史料情報資源化ミニユニットでは、九月六日に研究会談会「料紙研究を語る」を開催し、データ駆動型PJでは、国立国会図書館が二〇二二年四月に公開したOCRソフトウェアであるNDJOCRを用いた史料集版面のテキスト化および検索システムの開発に取り組んでいる。

史料編纂所は、二〇一九年度から日本学術振興会（JSPS）の人文・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業における人文学唯一の拠点機関に認定され、最高ランクSの中間評価も受けているが、本センターは一貫してその中核的な役割を果たしてきた。本年度は、以下の通り、①データアーカイブ機能の強化（共有化）、②海外発信・連携機能の強化（国際化）、③データ間の連携を可能にする環境の整備（連結化）の取り組みを実施した。

①共有化では、本年度、史料編纂所がジャパンリンクセンター（JALC）の正会員となり、Hi-CATのDOI（Digital Object Identifier）付与方式について検討・整理し、日本学術振興会と国立情報学研究所（NII）が運用する人文学・社会科学総合データカタログ（JDCat）にデータを提供した。備後福山藩阿部家史料へのDOIの付与とJDCatへの登録を進めている。史料調査データを長期保存・長期利用するためのシステム環境整備としては、OAI-S（Open Archival Information System）参照モデルに準拠して構築・運用している史料画像デジタル化進捗管理システムに、本年度から史料探訪の経過を記録した文書ファイルの登録が可能となった。IIFR（International Image Interoperability Framework）に対応した史料画像情報（公開では、広島県の海の見える杜美術館と連携して一〇月から同館所蔵「岩倉具視関係史料」（国指定重要文化財）の画像を、京都府の松尾大社と連携して二〇二三年一月から同社所蔵「松尾大社史料」の画像を、Hi-CAT Plusより公開した。二月にはデジタルギャラリーから藤木久志編『日本中世気象災害史年表稿』（高志書院）のデータも公開した。また、二〇二三年三月に京都府立京都学・歴史館と連携して同館編『東寺百合文書』第一巻（イ函、ロ函）の本文を、古文書フルテキストデータベ

ースより公開した。

②国際化では、史料編纂所の維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトと連携して、維新史料網要データベースの網文の英訳化と史料・歴史用語の英訳クローサリー研究を進め、維新史料網要データベース英語版の提供とデータのアップロードを開始し、一月一七日には国際研究集会「維新史料研究と国際発信」を開催した。データ共有・利活用に関しては、東京大学がホストとなって開催したデジタル・ヒューマニティーズに関する最大規模の国際会議である Digital Humanities 2022 (DH2022) 七月二五～二九日)において、日本では初めての人文科学研究データ管理に関するイベントである FRONTIERS IN HUMANITIES RESEARCH DATA MANAGEMENT (人文科学研究データ管理の最前線)を、本センターの教員が中心となって七月二五日に主催した。また、第三二回日本資料専門家欧州協会年次大会 (EAFRS2022) 九月一四～一七日)にも参加して報告を行い、国内外へ研究成果を発信した。

③連結化では、六月から神奈川県立金沢文庫が公開した国宝金沢文庫文書データベースのリニューアルに連携事業の一環として協力し、日本古文書ユニオンカタログとの連携も実現させた。

【共同利用・共同研究拠点の活動】

史料編纂所は、二〇一〇年に文部科学大臣より「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」として認定され、共同利用・共同研究拠点としての活動を開始している。この研究拠点は、研究資源とその利用手段の充実によって日本史研究の発展を願う研究者コミュニティの要望にこたえ、これまで蓄積してきた研究資源に加え、国内外に存在する日本関係史料について、国内外の研究者と共同調査・共同研究を行い、全体的・系統的な研究資源の蓄積と共同利用を促進し、史料学研究・日本史研究の質の向上をめざすことを目的としている。

この目的を達成するため、特定共同研究と一般共同研究の二つの枠組みで活動を行っている。特定共同研究は、古代史料・中世史料・近世史料・海外史料・複合史料の五つの領域ごとに拠点が設けた課題につき共同研究者を公

募し、一般共同研究は所外の研究者を対象に、課題と共同研究者を公募するものである。応募された課題は、学外委員が過半数を占める東京大学史料編纂所協議会において、審査基準に則った評価をもとに審議採択されている。

国立大学法人の中期目標期間第四期の初年である本年度は、四九名の所外研究者の参加による五件の特定共同研究課題と、のべ九三名の所外研究者とのべ五二名の所内研究者の参加による二〇件の一般共同研究課題を遂行した。新型コロナウイルス感染症による研究活動への制約が依然として続くなか、オンラインなども利用して活発な共同研究が行われ、研究会・シンポジウムでは研究会談会「料紙研究を語る」(二〇二二年九月六日)など、博物館等展示では、「きのくにの大使若経―わさわいをはらう経典」(和歌山県立博物館、四月二三日～六月五日)、「兼好法師と徒然草―今解き明かす兼好法師の実像」(神奈川県立金沢文庫、五月二七日～七月二四日)、「袋中上人と山の寺念仏寺」(元興寺法輪館、一〇月二二日～十一月三日)、「山の寺」念仏寺と江戸時代の奈良町―絵師竹坊と「開化天皇陵」関係史料を中心に」(奈良市史料保存館、一〇月一八日～十一月三日)、「法会への招待―「称名寺聖教・金沢文庫文書」から読み解く中世寺院の法会」(神奈川県立金沢文庫、一二月二日～二〇二三年一月二九日)などの形で成果を公開した。また、各研究課題に関する多くの論文のほか、三冊の研究報告書がまとめられた。史料の目録・画像については、図書閲覧室や史料編纂所のデータベースを通して利用できるようにしており、研究成果の公開・社会還元を進めている。

【特定事業費、競争的資金および学内連携研究機構による大型プロジェクト】

一 天皇家・公家文庫プロジェクト

一 五年間連続した人文社会系屈指の大型科学研究費、(i) 二〇〇七～一六年度基盤研究(S)「日本目録学の構築と古典学の再生」、(ii) 二〇一二～一六年度基盤研究(S)「日本目録学の基礎確立と古典学研究支援ツールの拡充」、(iii) 二〇一七～二二年度基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展」(研究代表者：田島公。以上、中間評価及び事後評価は共に全て「A」評価)を継承し、二〇二〇～二四年度の五年間の

予定で実施している、概算要求事項「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」事業（担当：古代史料部第三室）では、二〇二一年度までに公開した、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け本」・山口県立山口図書館所蔵萩藩明倫館旧蔵今井似閑本・西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本のデジタル画像累計約六万四千件について、安定的なWeb公開を本所DB (SHIPS) からのHi-CAT Plusから行うと共に、新たに二〇二二年九月より宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の(Ⅰ)内匠寮本「中井家文書」の内、①「寛政度」京都御所造営関係文書(函号E2-111)・②「安政度」京都御所造営関係文書(函号E2-101)約二万画像の高精細デジタル画像と、(Ⅱ)同文庫所蔵「近世公家日記類」約一三万六千画像(有栖川宮家本・阿波国文庫本・桂宮家本・久我家本・御所本・青蓮院本・白川家本・鷹司家本・土御門家本・庭田家本・野宮家本・橋本家本・葉室家本・日野家本・日野西家本・平田家本・松岡家本・壬生家本・函号に家わけ記号のないもの(山科忠言卿記・泰重卿記他)のWeb公開を開始した。これにより、Web公開した天皇家・公家文庫関係資料のデジタル画像の累計は約八二万画像となった(本所閲覧室の情報端末PCで公開している京都御所東山御文庫所蔵禁裏本・陽明文庫所蔵近衛家伝来本「累計三三万画像」を含めると総計約一一五万画像を公開中)。なお、①「寛政度」京都御所造営関係文書」の残りの帳簿類約二万画像のデジタル画像の蒐集を完了し、平井聖編著『中井家文書の研究―内匠寮本図面篇』全一〇巻(中央公論美術出版、一九七六―八五年)刊行の為に撮影後、同部に寄贈・保管されていた4×5モノクロフィルムを、同部の許可を得てスキヤニングしたデジタル画像二三四四点も蒐集し、併せてWeb公開の準備をしているので、近世公家関係・内裏造営研究の為に研究環境は大きく進展することが予想される。さらに二〇二二年一月一〇日には京都府立京都学・歴史館に日本史や建築史の研究者・大学院生等約七〇名が集い、第三回国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を開催し、『報告集』三も刊行した。建築史学と文献史学とが融合し、上記デジタル画像等を活用した研究報告ができた(『建築史学』八〇号―二〇二三年三月―所収の「学界短信」も参照)。また、同じく歴史館では、二〇二二年二月五日に開催を予定しながら、新型コ

ロナウイルス感染症第六波の拡大により延期した「第二回陽明文庫講座」を同年五月一日に開催した。引き続き、二〇二三年二月四日には「陽明文庫資料からの新発見Ⅲ」をテーマに「第一三回陽明文庫講座」を開催し、『陽明文庫講座図録』四も刊行して、一三件の史料の紹介・検討を収載した。その他、古代史料部第三室編担当の大日本古記録『陽明文庫本 勘例』下(二〇二三年三月)の刊行により、学界待望の陽明文庫本「勘例」七巻が、断簡も加え、その全容が活字本として初めて公開されたことは、長年の本研究プロジェクトの大きな成果でもある。また、プロジェクト期間内の刊行を目指し「新訂増補日本古代人名辞典」上・中・下(吉川弘文館)の編纂も行っている。

二 維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト

史料編纂所の維新史料網要データベースにもとづく、国際的な幕末維新期研究の基盤形成をめざし、引き続き網文データの英訳事業を進めている。外国人研究員と共同してデータの蓄積・更新につとめ、関連のグロッサリーを構築中である。維新史料網要データベースでは、各網文データの詳細表示画面上にその英訳を併記して表示し(英訳データは現在登録済みの部分のみ)、また同英語版のSummary database of the Isin Shiryōとして、英語キーワードによる検索と結果表示を実装している(詳細検索については今後の課題である)。この英語版については、アップロード済みのデータがキーワード検索可能であるが、全英訳データが検索可能となることを目標として携しており、引き続き本所所蔵の特殊蒐書コレクションである史談会本の撮影・データ化を推進している。

今年度も在外外国人研究者の協力を得て国際研究集会を開催した。一月一七日開催の国際研究集会「維新史料研究と国際発信」では、Web会議システムを用いた報告・討論をおこなったが、日本史研究者のL・ロバーツ教授およびR・ヘリヤー教授を合衆国から招聘して、翻訳にともなう諸問題をめぐって報告していただいた。また、横浜開港資料館との連携によるフランス外務省史料等の新規収集(データスキャン)と公開に向けての作業を、さらに進展させた。従来史料編纂所図書室で公開している在外史料画像(三)

CAT Plus)の全体を視野に入れることで、幕末から近代にかけての外交史についてのさらなる検証を、今後可能とするものである。

三 前近代地震火山史料研究プロジェクト

史料編纂所では、現在、地震研究所と連携して前近代の地震史料を研究するプロジェクトを二件実施している。一つは、二〇一四年度より開始した地震・火山噴火予知研究協議会史料・考古部会の研究課題「文献史料による歴史地震に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」である。これは既刊の地震史料集の全文テキストデータベース化を進める取り組みであるが、二〇二一年度に『増訂大日本地震史料』『新収日本地震史料』全冊のテキスト化が完了し、「地震史料集テキストデータベース」として一般公開を開始した。本年度は、既刊史料集掲載史料を史料原文と対照させて校訂を進めた。また全文テキスト中の地名を自動的に抽出するための検討を行った。まだ試験段階であるが、自動抽出の精度を高め、地震を感じた場所に位置情報を付与し、地図上に表示できるようにしていく計画である。

もう一つは史料編纂所と地震研究所が連携して前近代の地震史料研究を行うために、二〇一七年度より学内に設置した地震火山史料連携研究機構（設置期間七年間）における取り組みである。ここでは既刊・未刊を問わず、日本国内の諸地域における有感地震記録を定点観測的に収集する研究プロジェクトを進めている。特に一九世紀の日記史料から有感地震記事を収集し、データベース化する取り組みを行っている。本年度は、既刊史料集や史料編纂所架蔵史料からの採録のほか、大分県佐伯市、熊本県熊本市などでの史料調査を行った。また地震研究所の教員と連携して、教養学部で文系・理系の学生を対象に学術フロンティア講義「歴史資料と地震・火山噴火」を開講した（履修者約八〇人）。また一二月に本所、地震研究所、地震火山史料連携研究機構、地震・火山噴火予知研究協議会史料・考古部会の共催によって、「地震史料シンポジウムⅡ 災害史料研究が拓く歴史学の新たな方法」をハイブリッド形式で開催した（報告者八名、参加者約一三〇名）。

四 連携研究機構ヒューマニティーズセンター等におけるプロジェクト

連携研究機構ヒューマニティーズセンターは、人文学の振興を目指して二〇一七年七月に、五年間の予定で設置された。今年度、あらたに人文社会系

研究科を主管部局とし、企画・運営体制を強化することとして再設置を申請して認められた。史料編纂所も、引き続き連携部局として参加・協力している。今年度は五名の教員が公募研究・協働研究等のメンバーとして活動しており、本所教員が企画する国際研究会・オーブンセミナーが三件開催された。また研究成果をまとめた国際共著一点が刊行された。このほか外部経費等を得た多くのプロジェクト研究が行われている。今年度は、研究所の研究成果報告書シリーズとして、史料目録・史料翻刻等を含め、計八冊が刊行されている。

【国際交流と史料蒐集活動】

史料編纂所では、早くから海外所在の日本関係史料に注目し、日本学士院・国際学士院連合(UAI)などの支援を得て、その調査・収集を行ってきた。日本学士院は一九一九年に国際学士院連合に加盟し、共同研究活動に参画しているが、その代表的なものが一九二二年から始まった海外における未刊行日本関係史料の調査事業である。本所は一九五四年から、その一環である「在外未刊行日本関係史料の収集・複本作成事業」を委嘱されている。

近年では、欧米での調査に加え、東アジア諸国やロシアの関係機関との交流も深め、これらの国々における調査・収集にも取り組んでいる。また、日本・中国・韓国を代表する歴史研究編纂機関の友好協力関係の基盤を形成するために「東アジア史料研究編纂機関協議会」を設け、理事機関として参加し、定期的に国際学術会議を開催している。コロナ禍によって、二〇二〇年度に韓国国史編纂委員会主催で実施予定であった国際学術会議が延期となっていたが、二〇二二年一月にオンライン開催の運びとなった。各国から三名の研究者が報告を行ったほか、理事会が開催された。理事会では共同協定の更新にあたっての内容の確認が行われ、その後、各研究機関の代表が協定書に署名した。次の学術会議は、二〇二五年度に史料編纂所主催で行われる予定である。

【貴重史料の調査・研究と保全事業】

二〇二二年度には史料編纂所所蔵の『言継卿記』が新たに重要文化財に指

定された。このように多くの貴重史料（国宝一件・重要文化財二〇件を含む
原本史料二〇万点など）を所蔵しており、それらの適切な保存管理は重要な
課題である。これらの貴重史料については、予算確保に努めて修理を実施す
るとともに、解体等の際にのみ可能となる調査・研究を継続している。二〇
二二年度には以下の事業を行った。

①二〇二二年度より『原本史料情報解析』の方法による南九州関係文書の
保全と研究』プロジェクトを開始し、鹿児島を中心とする南九州地域に関
わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を進めている。史料保存技術室
では、二〇一五～一九年度まで行なわれた「原本史料情報解析による複合
的史料研究の創成事業」の一環として開始した『島津家文書』の修理を継
続しており、二〇二二年度には三巻（51～1～3、文書八一点）の料紙デ
ータの採集を行った。また、西国武家文書である『湯原家文書』（文書二
一九点）についても解体および料紙データの採集を行った。

②画像史料解析センターのプロジェクトの一環として、所蔵するガラス乾板
の保全（クリーニング・状態調査の作成）・養生（包材・保存箱への収
納）を、当該技術の強化を図る民間業者に依頼して進めた。

③二〇二二年度においても感染症対策のため、閲覧室の利用を一部制限せざ
るを得なかった。あらためて史料のデジタル化推進の重要性が認識される
中、今年度も東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により、史料編纂所
所蔵特殊蒐書「島津家本」のデジタル化を進め、二五三点を撮影した。こ
れらの高精細貴重史料画像は既存の史料編纂所「所蔵史料目録データベ
ース」などからWeb公開を進めている。

以上のほか、二〇二二年度より国の国宝重要文化財等保存・活用事業費補
助金の交付を受け、史料編纂所所蔵の国宝『島津家文書』および重要文化財
『蔣洲咨文』『明国劄付』の修理事業を開始した。また、史料保存の重要な基
盤である書庫環境の整備のために、設備の更新や書庫内配置の再検討・移動
等を引き続き進めることにより、貴重史料の保存と整理に必要な書庫スペ
ースの捻出に努めている。

これらの活動は、「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究とその共有
化」として東京大学未来社会協創推進本部の登録事業となっている。教員と

ともに、修補・撮影等を専門とする史料保存技術室の職員が積極的にわか
り、大きく貢献している。さらに史料の管理・保全全般を担う図書部も、史
料の整理・登録や画像公開・史料利用者への対応・書庫の環境整備などに
力している。

【未来社会協創推進本部プロジェクト】

二〇一五年に国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）を、指
定国立大学の課題として、東京大学に設置された未来社会協創推進本部の
とで取り組んでいる。史料編纂所では、「日本各地域の文化資源保全と地域
アイデンティティ構築への貢献」、「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究
とその共有化」「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」の三件のプロジ
ェクトを登録して活動している。

【社会連携・公開・発信】

史料編纂所の史料調査・収集事業は、上述の外部資金によるプロジェクト
や共同利用・共同研究拠点のプロジェクトを通じて、地域の博物館・資料館
や地方公共団体の関係機関と連携した取り組みとなっている。横浜開港資料
館とは、HOLTERSによる史料画像の連携公開を進めており、イギリス
国立公文書館（連携公開中）、フランス外交文書館、ドイツ連邦文書館、プ
ロイセン枢密文書館、ドイツ連邦軍事文書館などが所蔵する日本関係史料デ
ータの共有・提供について協議し、公開の準備を進めた。また、すでに触れ
たようにデータインフラ事業によって、広島県の海の見える杜美術館、京都
府立京都学・歴史館、京都府松尾大社等の所蔵史料等の画像の連携公開を行
っており、今後も大きく推進していく予定である。

市民への公開・発信という面では、所内のさまざまなプロジェクトによる
取り組みのほか、二〇一六年以来、本所の企画により文京アカデミア講座
（文京アカデミア主催、史料編纂所協力講座）を継続して開講してきた。二
〇二二年度は「史料研究の最前線―史料編纂所の共同研究から―」というテ
ーマで、前期（五～六月）・後期（一〇～十一月）各五回を実施した。前後
期ともに対面で、通常よりも定員を絞って実施した。実施後のアンケートに

よれば、受講生の満足度は高い水準を維持しており、個別の感想も高評価で、リピーターも形成されている。これに加え、名古屋・栄中日文化センターで五回の協力講座を実施した。また本年度より、あきたスマートカレッジ（秋田県生涯学習センター主催）でも協力講座（五回）を開始した。

【教育への参画、学部・大学院教育】

史料編纂所の教員は、本学の人文社会系研究科（日本史学、文化資源学）や大学院情報学環・学際情報学府における大学院教育に参加している。また全学自由研究ゼミナールなど、教養学部の学部教育にも携わっている。あわせて、日本史の研究についてのRA制度を設けて本学院生への研究支援を行っている。また多くの教員は、学外の国公私立大学で非常勤講師を兼務するなど、幅広く大学の日本史教育に従事している。さらに、日本学術振興会の特別研究員の受入れや、海外からの若手研究者（DC院生等）を外国人研究員として受け入れるなど、内外の若手研究者育成に貢献している。

【教員評価、外部評価】

『東京大学史料編纂所報』は、研究所の当該年度の各種の研究活動を集約して、記録する役割を果たすだけでなく、研究所における研究活動状況を自ら点検・総括する自己評価活動の媒体としても機能するものと考えている。個々の教員の評価については、教授任用から一〇年を経過した段階で、自己評価に加えて、所外委員による評価を行っている。二〇二二年度は杉本史子教授（近世史料部門）・本郷和人教授（古代史料部門）を対象として実施し、詳細を本誌に掲載した。また、全教員を対象とした定期的な教員評価（教授・准教授・助教を三つのグループに分け、原則として三年で一巡）を、常勤教員八名を対象として実施した。

古代史料部門

二〇二二年度の刊行物としては、第一室が『正倉院文書目録』九 続々修四を、第三室が『大日本古記録』「陽明文庫本 勸例下」を、それぞれ刊行

し、第一室は昨年度公開の準備を完了した『九世紀編年史料（貞観―仁和）』一について「編年史料（古代）編纂支援資源化データベース MDOH」から公開した。 <https://www.wap.hi-u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search>
また、第二室が『大日本史料』第二編之三十三（長元六年正月）の、第三室が第三編之三十一（保安四年正月）の、第四・五室が第五編之三十八（建長四年正月）の、編纂をそれぞれ行った。

本部門所属教員（以下、部門教員。兼任教員も含む）が関わった所内プロジェクト研究は以下の通り。

（一）データベース関係 「編年史料（古代）編纂支援資源化データベース MDOH」（担当：山口英男）の公開を開始し、「大日本史料総合データベース」・「編年史料カード」等のデータベースに各室のデータ入力を進めた。この他、「正倉院文書マルチ支援データベース SHOMUS」・「奈良時代古文書フルテキストデータベース」（担当：第一室）、「HiCAT Plus（禁裏公家文庫）」（担当：第三室・新井重行）、「歴史絵引データベース」・「史料編纂所所蔵肖像画模本データベース」・「肖像情報データベース」（担当：藤原重雄）、「日本史用語翻訳グロッサリー」・データベース（旧応答型翻訳支援システム）（担当：堀川康史）等を担当した。

（二）共同利用・共同研究拠点 「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」の研究課題 ①特定共同研究では、「古代史料領域」「奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究―小川八幡神社大般若経を核として―」（代表者：稲田奈津子、所内共同研究者：山口英男・田島公・藤原重雄・新井重行・堀川康史・黒須友里江・小塩慶）、「複合史料領域」「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」（所内共同研究者：藤原重雄）を担当した。なお、「古代史料領域」の研究課題の成果の一部は、和歌山県立博物館での特別展「きのくにの大使若経―わざわいをはらう経典―」（二〇二二年四月二三日～六月五日）で公開された。②一般共同研究では、「日本史用語グロッサリーの再構築にむけて」（代表者：Yudia Kanagawa、所内担当者：堀川康史、所内共同研究者：小塩慶）・「蒐集デザイン画像を活用した「魚魯愚鈔」の情報資源化と除目研究の基盤形成」（代表者：志村佳名子、所内担当者：田島公）・「中井家文書」を中心とする建

築関連史料の高度資源化と活用」(代表者：海野聡、所内担当者：新井重行、所内共同研究者：田島公)・「愛知県津島市西光寺所蔵地藏菩薩立像(水落地蔵)胎内納入品の基礎的研究―諸国勧進地藏菩薩印仏を中心に―」(代表者：川尻秋生、所内担当者：小塩慶、所内共同研究者：田島公・藤原重雄・堀川康史)・「吉野修験関係史料の調査」(所内共同研究者：堀川康史)に参加した。

(3) 画像史料解析センター研究プロジェクト 本部門が中心となったプロジェクトとして「正倉院宝物図プロジェクト」(代表者：稲田奈津子、メンバー：山口英男・藤原重雄・新井重行)がある。

(4) 概要要求事項(事業費)「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」事業(担当：第三室 二〇二〇～二〇二四年度の三年度目。公開講座・研究会として、①金鶏会館連続公開講座「(新)【古典から読み解く歴史学】」春季・秋季&冬季、②第一・二・三回「陽明文庫講座」(なお第二回は二〇二二年度開催予定だったが、新型コロナウイルス感染症の蔓延拡大により延期されたもの)、③第三回国際研究会「国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を開催し、『国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集』3(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二・四)、『陽明文庫講座図録』4(同報告二〇二二・五)を刊行した。また禁裏・公家文庫所蔵史料のデジタル画像の蒐集と公開(後述)及び『増補改訂版日本古代人名辞典(仮)』上・中・下の編纂を行った。

(5) その他『正倉院文書目録』編纂のための調査等を、部門教員等が関わった「正倉院文書」プロジェクト(担当：第一室)として実施している。部門教員が関わった所外プロジェクト研究は以下の通り。

(1) 科学研究費のうち部門教員が研究代表者となった研究課題 ①基盤研究(A)「データ繋留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開」(代表者：山口英男)、②基盤研究(C)「東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―」(代表者：稲田奈津子)、③若手研究(B)「足利義満期武家政治史の研究―義満の権力確立過程の再検討を中心に―」(代表者：堀川康史)、④若手研究「平安時代後期政治構造の史

料学的研究」(代表者：黒須友里江)。その他、基盤研究(A)「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明」(研究代表者：海野聡、東京大学大学院工学系研究科准教授)の分担金(研究分担者：田島公・新井重行)により、前近代建築関係資料のデジタル画像へのメタ・データ付与や内裏(宮殿)建築関係史料の収集も行った。

(2) 競争的資金のうち部門教員が研究代表者となり受け入れた研究課題 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンターLUI公募研究(A)に採択された研究課題「金石文資料からみた東アジアの墓葬文化―墓誌・買地券を中心に―」(代表者：稲田奈津子)等の研究成果として、稲田奈津子・王海燕・楠佳子編著『黄泉の国との契約書―東アジアの買地券―』(勉誠出版、二〇二三年三月)が刊行された。

(3) 受託研究費 福岡市史編纂委員会「福岡市域に関わる史料の調査及び研究」(担当者：山口英男)を行った。

上記編纂・研究活動に伴い部門教員が中心となって継続している史料探訪では、京都御所東山御文庫(宮内庁侍従職管理)所蔵史料、宮内庁正倉院事務所所蔵正倉院文書、公益財団法人陽明文庫所蔵近衛家伝来史料・和歌山県立博物館寄託小川八幡神社大般若経等の調査があり、デジタル画像の蒐集・公開に関する活動では、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け」史料・西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本等のデジタル画像の蒐集・Web公開、公益財団法人陽明文庫所蔵近衛家伝来史料・京都御所東山御文庫所蔵禁裏本・同別置本のデジタル画像の蒐集・閲覧室情報端末公開がある。

以上、詳細については、「史料研究・成果公開」・「所員研究活動」・「史料探訪」等、関係の各項目を併せて参照されたい。

中世史料部門

二〇二二年度の刊行物として、編年第六室が『大日本史料 第六編之五十一』を、編年第七室が『大日本史料 第七編之三十五』をそれぞれ刊行した。各出版物の概要については、「出版報告」の項を参照されたい。

共同利用・共同研究拠点「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」の

活動では、特定共同研究の中世史料領域「賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究」に代表者として一名、所内共同研究員として一名、複合史料領域「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」に所内共同研究員として三名、それぞれ部門員が参加した。また一般共同研究では、「松尾大社所蔵史料の研究資源化」に一名、「国宝菅浦文書と関連史料の伝来形態と料紙に関する研究」に一名、「高野山子院伝来資料の分野横断的研究—金剛三昧院・西南院を中心に—」に一名、「史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究」に二名、「日本史用語グロスサリーの再構築にむけて」に一名、「明智光秀旧臣山崎家伝来文書の基礎的研究」に一名、「兵庫県内外所在播磨国人史料の調査・研究」に二名、それぞれ部門員が所内共同研究者として参加した。

史料探訪、科学研究費補助金による研究、所内研究プロジェクト等についても、本年度も多くの部門員がそれぞれの立場で参加した。件数も人数も多く、これらについては「史料探訪」「史料研究・成果公開」「所員研究活動」の各項に詳細な報告があるので、そちらを参照していただきたい。

近世史料部門

二〇二二年度の各室の編纂・出版活動等は以下の通りであった。近世第一室：『大日本史料 第十二編之六十三』 出版／近世第二室：『大日本近世史料 細川家史料二十八』 出版／近世第三室：『大日本近世史料 市中取締類集三十二』 出版／近世第四室：『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記十五』 出版準備／『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之八』 出版準備／『維新第一室：『大日本維新史料 類纂之部』 新書目出版準備／『維新第二室：『大日本古文書 幕末外国関係文書之五十四』 出版／地震・火山史料プロジェクト：二〇二二年一月二三日、本所と地震研究所、地震火山史料連携研究機構、地震・火山噴火予知研究協議会史料・考古部会の共催により、「地震史料シンポジウムⅡ 災害史料研究が拓く歴史学の新たな方法」をハイブリッド形式で開催（報告者八名、参加者約一三九名）。

また、二〇二二年一月一日、本所主催、維新史料研究国際ハブ拠点形成

プロジェクトとJSPS科研費22H00692の共催、JSPS科研費20H00023の協力により、『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』出版完結記念の国際研究集会「幕末維新史料研究と井伊家史料」をオンラインで開催した（報告者四名、参加者一三八名）。

各教員が実施した調査活動については、史料探訪の項を参照願いたい。

共同利用・共同研究拠点、特定共同研究、近世史料領域課題「史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化」（研究代表者：小野将）を推進した。また、「維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト」（研究代表者：小野将）では、「維新史料網要データベース」の英訳・グロスサリー研究、維新関係史料のデジタルアーカイブ化、海外研究者との国際的な研究ネットワーク（ハブ拠点）構築の取り組みを続け、二〇二二年二月十七日、本所・同プロジェクト主催、JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業、JSPS科研費20H00023・同22H00692の共催により、国際研究集会「維新史料研究と国際発信」をオンラインで開催した（報告者三名、参加者八四名）。

教員が研究代表者となり、科学研究費補助金を得て進めた研究には、以下のものがある。基盤研究(C)「近世大名家臣家史料の共同分析—多久家史料の読み直しを中心として—」（研究代表者：小宮木代良）二〇一七—二〇二二年度、基盤研究(A)「分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元」（研究代表者：鶴田啓）二〇一九—二〇二二年度、基盤研究(B)「明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築」（研究代表者：箱石大）二〇一九—二〇二二年度、若手研究「近世における朝廷中枢による門統統制の解明」（研究代表者：石津裕之）二〇一九—二〇二二年度、基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」（研究代表者：保谷徹）二〇二〇—二〇二二年度、若手研究「日本近世における政教関係の形成と確立」（研究代表者：林晃弘）二〇二一—二〇二二年度、基盤研究(B)「近世書状史料群の研究と歴史情報資源化」（研究代表者：松澤克行）二〇二一—二〇二二年度、基盤研究(B)「日本近世史料学の再構築—基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」（研究代表者：杉本史子）二〇二一—二〇

二四年度、基盤研究(C)「徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―」(研究代表者・及川亘)二〇二二―二〇二四年度、基盤研究(C)「預人の政治的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究」(研究代表者・荒木裕行)二〇二二―二〇二四年度。

また、部門独自の社会連携活動として公益財団法人徳川記念財団が主催する古文書講座に講師を派遣した。

他にも所・学内外の各種共同研究プロジェクトに部門教員が参加している。それらについては、本『所報』各項のほか、『東京大学史料編纂所研究紀要』、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』、東京大学および東京大学史料編纂所のウェブサイト掲載記事等も併せて参照願いたい。

古文書・古記録部門

二〇二二年度、古文書室では四書目(東寺百合文書・大徳寺文書別集徳禪寺文書・東大寺文書・醍醐寺文書)、古記録室では五書目(中右記・平記・実躬卿記・薩戒記・後法興院関白記)の編纂を行った。また、古文書室では『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書別集徳禪寺文書之二』を、古記録室では『大日本古記録 實躬卿記 十』を刊行した。出版物の概要については、「出版報告」の項を参照されたい。

編纂各書目については、原史料の詳細な観察によって定本的テキストを作成する、あるいは様々な種類の写本を比較検討し、より良質で完成度の高い原形態の復元を果たすという方針のもとに、史料調査・採訪などを行った。主な調査先は、京都府立京都学・歴史館、大徳寺塔頭徳禪寺、東大寺図書館、醍醐寺、西大寺、陽明文庫、国立歴史民俗博物館、杏雨書屋、宮内庁書陵部、国立公文書館、尊経閣文庫などであった。

部門構成員は、各人の研究・編纂との関連に応じて研究プロジェクトを組織し、参加している。科学研究費補助金による研究で、当部門構成員が代表者として統轄しているおもな共同研究には、「日本中近世寺社(記録)論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化」(基盤研究(A)、代表者遠藤藤郎、二〇一八―二〇二二年度)、「デジタル技術による金石文史料の研

究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」(基盤研究(A)、代表者菊地大樹、二〇一九―二〇二三年度)、「荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究」(基盤研究(A)、代表者井上聡、二〇二二―二〇二六年度)がある。各研究は、それぞれの課題とする史料の研究資源化をはかりながら、あらたな歴史叙述を模索しての研究を進めている。

当部門と密接に関わるデータベースに、古文書フルテキストデータベースと、古記録フルテキストデータベースがある。古文書フルテキストでは、新刊分として『大日本古文書 島津家文書』六、『大日本古文書 東寺文書』一八、『大日本古文書 大徳寺文書別集徳禪寺文書』一、『大日本古文書 醍醐寺文書』一七、『大日本近世史料 細川家史料』一八・二七のデータを公開、また週及分として『大日本古文書 伊達家文書』一・二、『大日本古文書 上杉家文書』一・二・三、京都学・歴史館編『東寺文書』百合文書イ函分、同口函を同じく公開した。古記録フルテキストでは、『大日本古記録 言経卿記』五・六、『大日本古記録 平記』上、『大日本古記録 中院一品記』下のデータ作成・公開を行った。また禅籍史料研究プロジェクトの成果として、その他の諸活動については、「史料研究・成果公開」「所員研究活動」の各項を参照されたい。

特殊史料部門

特殊史料第一室は、兼任室員のもとで「花押かがみ」編纂に関する準備作業を行っている。編年各室で作成された「花押彙纂」のデータベース化については、前年度までに引き続き、画像史料解析センターの「花押彙纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト」に参加して行っている。なお、同プロジェクトには科学研究費基盤研究(A)「筆跡・花押情報の高効率活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による」(研究代表者末柄豊氏)および奨学寄附金(林讓氏)による支援を受けている。

海外史料第一室は、『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原譯文編之六の原稿準備と共に、後続巻に収載する予定の原稿整理を行った。現在

編纂担当者は一名であるが、今後も三年に一冊原譯文編の刊行を維持していく予定である。所内のプロジェクトとしては「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成（代表者保谷徹）」において、明治初期に日本をユーラシア大陸陸路で訪問したイタリヤ人貴族の旅行記翻訳のマネージメントを行った。また特定共同研究「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」に参加し、一六世紀のポルトガル人のアジア進出に関する文献の翻訳を行った。

海外史料第二室は、『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』訳文編之十三（下）の出版に向けて、翻訳と読み合わせを行った。また、将来の編纂・出版の準備のため、オランダ商館長日記二六五八年度分の原本校訂作業を行った。新しい試みとして、日本商館のより深い理解のため、対照的な例としてジャワ東海岸商館を比較対象に選び、当該商館の一六八〇年代 *Mentorie van Overgave* について若干の翻刻も行った（ともに久礼克季による）。

さらに、本所蒐集海外史料マイクロフィルム（既刊『日本関係海外史料目録』V収録分）日本商館文書の明細目録データを写真帳と照合・校正し、所蔵史料目録データベースに内容細目として付加する作業を行った。また、BUBデータベースの元となるエクセル・データの日本語部分を英語に修正する作業も行った（ともに久礼克季による）。これにより、本所蒐集海外史料マイクロフィルム整理事業を完了した。

なお、本年度末に、海外史料第二室の松井洋子教授が停年退職した。

中世禅籍史料研究プロジェクトでは、本所所蔵「策彦周良文集」の電子テキスト化を進め、テキスト構造化の国際標準に準拠したデータを作成した。これをアプリケーションを介してHTML化し、本所ホームページのデジタルギャラリーにて全文を公開した。本所として初めての試みとなる（以上岡本主担当）。また、本所所蔵「帰周和尚語録」の電子テキスト化を完了し、古記録フルテキストデータベースから公開した。全文テキストに略解題を付したPDFは、各種成果のページにて公開した。

画像史料解析センター

1 構成

二〇二二年度のセンタースタッフは、第一分野（絵画史料）が高橋慎一朗教授（センター長）、稲田奈津子准教授、藤原重雄准教授、第二分野（画像史料）が菊地大樹教授、杉森玲子教授、第三分野（古文書画像）が荒木裕行准教授の六名であった。また、堀本一繁氏（福岡市博物館）に客員教授を委嘱した。

運営委員会は、上記のセンタースタッフ六名に、松澤克行准教授（運営委員長）、及川亘准教授、林晃弘助教、堀川康史助教の四名を加えた、一〇名で構成した。

2 プロジェクトの研究活動

二〇二二年度は、下記の二三件のプロジェクトを立ち上げ研究を行った。各プロジェクトのメンバーと活動の概要は以下の通りである。

【第一分野（絵画史料）】

① 『莊園絵図聚影』 釈文編・中世出版プロジェクト

（メンバー）榎原雅治（代表者） 稲田奈津子 井上聡 遠藤基郎 及川亘 川本慎自 菊地大樹 末柄豊 高橋慎一朗 高山さやか 谷昭佳 鶴田啓 藤原重雄 前川祐一郎 村井祐樹 村岡ゆかり 山口英男 山家浩樹 堀本一繁（客員教授） 高橋敏子（共同研究員、本所元教授） 鈴木沙織（学術専門職員）

〔活動の概要〕『日本莊園絵図聚影釈文編四 中世三・古代中世補遺』の出版準備／慶応義塾図書館所蔵東寺旧蔵絵図の調査・修理・撮影／莊園絵図の原本調査と現地踏査

② 正倉院宝物図プロジェクト

（メンバー）稲田奈津子（代表者） 新井重行 藤原重雄 山口英男
〔活動の概要〕京都大学附属図書館所蔵資料の所内デジタル公開／国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが、好きっ——近世好古図録の文化誌——」への協力／内閣文庫所蔵資料・東北大学図書館所蔵資料・本所所蔵資料などの撮影・データ収集／「正倉院御宝物之図（元禄図系統）」二点の購入／稲田奈津子「京都大学附属図書館所蔵『正倉院東大寺宝物』について

て」〔画像史料解析センター通信〕第九八号、二〇二二年一〇月〕

③長篠合戦図屏風プロジェクト―長篠合戦図屏風模写のための近世狩野派絵画および合戦図屏風の比較研究―

〔メンバー〕金子拓（代表者） 黒嶋敏 藤原重雄 村岡ゆかり 薄田大輔（共同研究員、徳川美術館） 白水正（同、犬山城白帝文庫） 津田卓子（同、名古屋市博物館） 原史彦（同、名古屋城調査研究センター） 阪野智啓（同、愛知県立芸術大学） 藤本正行（同） 三宅秀和（同、群馬県立女子大学）

〔活動の概要〕 本所模写室作成模写の熟覧・意見交換

④琉球諸島図プロジェクト

〔メンバー〕黒嶋敏（代表者） 須田牧子 畑山周平 渡辺美季（共同研究員、本学大学院総合文化研究科）

〔活動の概要〕「琉球諸島図」（本所所蔵）と「琉球并諸島図」（都城島津邸所蔵）の比較検討／都城島津邸・立正大学図書館古書資料館・沖縄県立図書館にて史料調査

⑤中近世肖像画研究プロジェクト

〔メンバー〕藤原重雄（代表者） 西田友広 松澤克行 高岸輝（共同研究員、本学人文社会科学系研究科） 藤井恵介（同、本学名誉教授） 太田まり子（学術専門職員）

〔活動の概要〕 本所所蔵模写「広橋綱光像」「広橋国光像」の撮影、賛の翻刻、データベース登録／法雲院所蔵烏丸家肖像画の追加調査／未入架模写「袋中上人像」の修補／「東京帝国大学附属図書館所蔵」絵画本目録稿の翻刻校正／国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが、好きっ！―近世好古図録の文化誌―」への協力（藤原重雄）／本所所蔵模写の撮影／「史料編纂掛備用写真画像図画類目録」の「画像の部」新旧架番号対照表のりポジトリ登録／大谷大学図書館所蔵「集古十種」原稿類の調査／元興寺所蔵の印仏類の撮影／肖像画模本データベースのデータ追加・修正／歴史絵引データベースのデータ追加／藤原重雄「国立歴史民俗博物館所蔵『聆涛閣集古帖』所収「二条良実似絵写」―列影図の伝来に関連して―」（画像史料解析センター通信）第九八号、二〇二二年一〇月／国際研究

集会「御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地（3）」（二〇二二年一二月一〇日、於京都府立京都学・歴史館にて藤井恵介が「平安時代の宮殿建設システムと建築様式「和様」を報告／藤原重雄「国立歴史民俗博物館所蔵『聆涛閣集古帖』所収「小野道風像写」―木村兼葎堂と吉田家―」（画像史料解析センター通信）第九九号、二〇二三年一月）

⑥近世都市図解析プロジェクト

〔メンバー〕山口和夫（代表者） 及川亘 藤原重雄 杉森哲也（共同研究員、放送大学） 西山剛（同、京都府京都文化博物館）

〔活動の概要〕 中世文学会春季大会シンポジウム「中世文学と絵画」（二〇二二年五月二八日、オンライン）にて藤原重雄が「洛中洛外図屏風の祖型を探る―行事図像の理解―」を報告／オンライン研究会を開催し（二〇二二年一二月二二日）西山剛・杉森哲也・及川亘が「京都府立京都学・歴史館所蔵「洛外社寺図巻」熟覧調査報告」を報告／佛教大学図書館所蔵「京名所絵巻」の調査／近藤重蔵関係史料（本所所蔵）の撮影

【第二分野（画像史料）】

①戊辰戦争期摺物画像研究プロジェクト―幕末維新期の諸藩出版物と版木・木活字の研究―

〔メンバー〕箱石大（代表者）

〔活動の概要〕 山口県文書館所蔵長州藩版板木・木活字群の調査／福島県歴史資料館所蔵史料の調査／秋田県公文書館所蔵史料の調査

②近世・近代摺物画像プロジェクト

〔メンバー〕荒木裕行（代表者） 吉田ますみ（共同研究員、三井文庫）

〔活動の概要〕 三井文庫所蔵近世・近代摺物（二四八点）のデジタル撮影

③古写真研究プロジェクト―高精細デジタル画像解析を基軸とした幕末明治初期写真史料の研究資源化推進プロジェクト―

〔メンバー〕箱石大（代表者） 桑田恵里 高山さやか 谷昭佳 遠藤菜子（共同研究員、東京国立博物館） 高橋則英（同、日本大学）

〔活動の概要〕 台東区立下町風俗資料館所蔵ガラス乾板写真調査／修美本社工房にて写真古典技法の復原に関する実験および映像制作（谷昭佳・高山さやか・桑田恵里）／鍋島報効会徴古館所蔵古写真の調査／慶應義塾大

学三田メディアセンター所蔵史料の調査／海の見える杜美術館所蔵史料の調査・撮影／イタリア所在日本関係古写真の調査／横浜開港資料館所蔵「木村芥舟関係写真資料」の調査／個人所蔵「辻善之助関係古写真資料」の調査／「本山家伝来古写真資料」の調査・目録作成／米沢市上杉博物館所蔵「上杉家伝来写真」の調査・撮影／国際カンファレンス「Colour Photography and Film, 2nd edition」(二〇二二年九月一五日、於フィレンツェトラルド講堂)にて谷昭佳が「Oil photography: A color-photographic technique, with no discoloration, unique to Japan in the nineteenth century」を報告／第七回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議「東アジア歴史資料編纂の伝統と現代化」(二〇二二年一月一日、オンライン)にて谷昭佳が「オーストリア⇨ハンガリー帝国東アジア遠征隊古写真資料集の編纂」を報告／谷昭佳「オーストリア⇨ハンガリー帝国東アジア遠征隊古写真資料集の編纂」『東アジア歴史資料編纂の伝統と現代化—予稿集』(大韓民国国史編纂委員会、二〇二二年一月)／Akioyoshi Tani, "Oil photography: A color-photographic technique, with no discoloration, unique to Japan in the nineteenth century", *Colour Photography and Film: Sharing knowledge of analysis, preservation, conservation, migration of analogue and digital materials — 2022: Conference Proceedings* (peer reviewed journal), 2nd edition, Gruppo del Colore — Associazione Italiana Colore publisher, (二〇二三年二月)／国際研究会「海外所在日本関係古写真の史料学研究」を開催(二〇二三年三月七日、オンライン)／谷昭佳「長崎本石灰町乙名本山家伝来古写真史料の概要」(「長崎市長崎学研究所紀要 長崎学」第七号、二〇二三年三月)

【第三分野(古文書画像)】

①金石文拓本史料の整理と公開

(メンバー) 菊地大樹(代表者) 稲田奈津子 井上聡 金子拓 川本慎自 高橋慎一朗 藤原重雄 村山卓(共同研究員、埼玉県埋蔵文化財調査事業団)

〔活動の概要〕蒐集した拓本の裏打ちと撮影・デジタル化の準備／金石文史料の調査と拓本採集(於和歌山県高野町高野山町石・奈良県五條市柴山寺)

②電子くずし字字典データベース開発プロジェクト

(メンバー) 井上聡(代表者) 新井重行 稲田奈津子 遠藤珠紀 小宮木代良 松澤克行 宮崎肇(特任研究員)

〔活動の概要〕くずし字データの切り出しと「電子くずし字字典データベース」へのデータ登録(一三万七三二二件)／データベースの入力校正機能の改修

③本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究

(メンバー) 井上聡(代表者) 桑田恵里 高山さやか 谷昭佳 箱石大藤原重雄

〔活動の概要〕ガラス乾板の保全とコンディションレポートの作成／国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」への協力／所外在ガラス乾板・台紙付写真の調査・撮影(於海の見える杜美術館・米沢市上杉博物館)

④花押彙纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト

(メンバー) 川本慎自(代表者) 井上聡 林譲(共同研究員、駒澤大学) 戸谷穂高(学術専門職員)

〔活動の概要〕「花押データベース」への花押カード・花押彙纂データ(五九六六件)ならびに新花押データ(一万二五七四件)の登録／既登録の花押カードデータを対象とした花押のサムネイル画像の作成／奈良文化財研究所「字形筆路情報取得プログラム」開発への協力

3 研究会の開催

本センター古写真研究プロジェクト(代表:箱石大)・科学研究費補助金「高精度デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板写真の史料学研究」(研究代表者:谷昭佳)の共催で、左記の国際研究会をオンライン開催した。

海外所在日本関係古写真の史料学研究(二〇二三年三月七日)

〔報告〕

海外所在日本関係古写真史料の調査研究の概要—在イタリア、在オランダを中心にして— 谷 昭佳

景色や風俗を写した写真が良い。イタリア初の日本・中国外交使節節
（1866年）エンリコ・ヒリエ・ジリオールの写真コレクション概要―

ステファノ・テュリナ（イタリア・トリノ大学）

日本の初期写真―日本とオランダが共有する歴史―

マーチャ・ファン・デン・フーフエル（オランダ・ライデン大学）

4 センター通信の発行

二〇二二年度は、次の四冊を発行した。

第九六号 二〇二二年四月発行 三二頁 撰津国垂水荘三国川中島差図と

その周辺（高橋敏子）ほか

第九七号 二〇二二年七月発行 一六頁 被災固着文書の開披法試論―宇

波西神社文書を題材にして―（山口悟史・高橋敏子）ほか

第九八号 二〇二二年一〇月発行 二四頁 京都大学附属図書館所蔵『正

倉院東大寺宝図』（稲田奈津子）ほか

第九九号 二〇二三年一月発行 二〇頁 静嘉堂所蔵「仏説中心経」と五

月一日経願文（市川理恵）ほか

（松澤克行）

前近代日本史情報国際センター

本センターは、史料情報集約化ユニット・史料情報資源化ユニット・歴史知識高度利用化ユニットの三つのユニットを設けて歴史情報学研究を推進している。また二〇二〇年度より、史料情報資源化ユニットのもとに原本史料情報資源化ミニユニットを置いている。多様な課題に対応するため、ユニット間で連携し、また他の研究グループとの協業で研究を進めている。二〇二一年九月より劉冠偉特任研究員がメンバーに加わっている。

1 JSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業
昨年度までと同様に、情報センターを中心として実施した。本事業ではデータアーカイブ機能の強化（共有化）、海外発信・連携機能の強化（国際

化）、データ間の連携を可能にする環境の整備（連結化）の三つを柱として推進している。本年度は以下について取り組んだ。なお、本事業は本年度をもって一旦終了する。

- ・進捗管理システムの改修・昨年度に引き続き、所外史料複製物利用条件確認方法検討ワーキンググループとともに、史料画像に関連するファイル管理できる機能の検討・開発を行った。

- ・データ利用条件の整備・岩倉具視関係史料（海の見える杜美術館所蔵、JSPS科研費19H01303および鹿島学術振興財団研究助成「明治太政官の官員旧蔵文書群に含まれる政府関係文書の史料学的研究」による、オープンデータとして公開）、松尾大社所蔵史料（JSPS科研費19H00549、共同利用・共同研究拠点一般共同研究「松尾大社所蔵史料の調査・研究」）、松尾大社所蔵史料の研究資源化」による）についてデータ利用条件を設定し、IIF（International Image Interoperability Framework）Presentation API対応として公開した。

- ・国立情報学研究所（NII）が構築した人文科学・社会科学総合データカタログ（DCA）より神奈川県立金沢文庫『国宝 金沢文庫文書データベース』収録の古文書目録データを公開した。また、金沢文庫文書DBと大日本古文書ユニオンカタログとのデータ連携も開始した。

- ・Digital Object Identifier（DOI）を備後福山藩阿部家史料および金沢文庫文書に対して付与した。

- ・デジタルギャラリから藤木久志編『日本中世気象災害史年表稿』（高志書院）のデータを公開した。

- ・維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト、および、共同利用・共同研究拠点一般共同研究「日本史用語グロッサリーの再構築にむけて」とともに、デジタルギャラリからのグロッサリーデータ提供に向けて作業を進めている。

- ・本事業に関連する取り組み・成果に関して、DHS2022（二〇二二年七月二四～二九日）¹、EJIRS2022（二〇二二年九月一四～一七日）²、じんもんこん2022（二〇二二年十一月）にて報告・広報した。また、「データインフラストラクチャー整備公開シンポジウム2023」（一橋大学経済研究所・東

京大学社会科学研究所主催、二〇二三年二月九日）にて本事業の成果をもとに報告を行った。

2 「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」プロジェクト

二〇二一年四月よりFSI事業として開始した。同事業の運用方式の変更により、予算措置は二〇二一年度限りとなったが、研究²⁾としては継続し、本年度は歴史知識高度利用化ユニットのもとで進めた。本年度の具体的な成果は下記のとおりである。

・くずし字自動解読の試み：版面画像および手書き史料画像を対象に、AI・機械学習の手法を用いて、文字の自動解読に取り組み、性能を向上すべくチューニング等を進めている。

・花押の自動分類：AI・機械学習による画像自動分類機能を応用し、花押の自動分類を試みた。

・翻字支援ツール「YAIST」の開発：unicodeに登録されている漢字は九万字を超える。翻字支援の必要性に着目し、ツール化を行った。

・上記を含むこれまでのツール・学習データを含む実験的試みを公開するためのJGUサイトを公開した。

3 公開検索システムのリニューアル

・昨年度のシステムリリースにあわせ、公開検索システムをリニューアルし、二〇二二年六月に公開した。

・新たなデータベースとして、編年史料（古代）編纂支援資源化データベース（MDOH）の公開を二月から開始した。

・画像史料解析センター関連データベースが旧公開検索システム利用のままであることから、新公開検索システムへの移行が課題である。まずは金石文拓本史料データベースを対象として、JSPS科研費19H00536および22H00016とともに新公開検索システムへの移行を実施した。

・HCAI等にて利用可能な新画像ビューアの開発をすすめた。画像とともにメタデータ等関連データを提示できる機能を付加する。本画像ビューアは二〇二三年度利用できる予定である。

4 原本情報資源化ミニユニット

昨年度に引き続き、情報センター史料情報資源化ユニットのもとに原本情報資源化ミニユニットを置いた。島津家文書のプロジェクトなど、多様な財源で進行している原本情報に関わる各種プロジェクトの結節点として機能する（財源は提供しない）。今年度は、共同利用・共同研究拠点一般共同研究四件、JSPS科研費四件、大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構令和四年度加速器科学総合育成事業「和紙を科学する」（研究代表者：高島晶彦）と連携した。松尾大社蔵史料の調査など六件の原本史料調査・分析を行った。

5 研究集会

・研究座談会「料紙研究を語る」（二〇二二年九月六日）

場所：史料編纂所演習室（一〇三室）

登壇者：富田正弘（富山大学名誉教授）、湯山賢一（神奈川県立金沢文庫・文庫長）、大川昭典（元高知県立紙産業技術センター）

聞き手：天野真志（国立歴史民俗博物館）、貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫）、山家浩樹、高島晶彦、渋谷綾子

・情報センター研究会「策彦周良文集」電子テキストの公開方法について（二〇二三年一月二日）

発表者：岡本真・中村覚

6 本所出版物のデータ搭載

下記を対象として版面画像の登録を行った。

『大日本史料第二編之三十二』、『大日本史料第五編之三十七』、『大日本史料第八編之四十四』、『大日本史料第十編之三十一』、『大日本史料第十一編之二十九』、『大日本史料第十二編之四十二』、『大日本近世史料 細川家史料 二十七』、『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記 十四』、『大日本古文書 醍醐寺文書 十七』、『大日本古文書 東大寺文書 二十四』、『大日本古文書 大徳寺文書別集徳禪寺文書 一』、『大日本古文書 東寺文書 十八』、『大日

本古記録 平記 上』、『大日本古記録 實躬卿記 九』、『大日本古記録 薩戒記 別卷』、『大日本古記録 中院一品記 下』

7 Hi-CAT Plus の目録整備

・前年度に引き続き、図書部史料情報管理チームの協力の下、目録室の専門職員三名により、西暦架・マイクロ架の目録作成(冊)と登録をすずめた。「盛岡市中央公民館所蔵史料」など九件を新規登録し、「東北大学附属図書館所蔵史料」「青蓮院吉水藏聖教」など五三件について一点目録作成や修正を行った。

・図書部史料情報管理チームにより、ポーンデジタル(海外S科研作業分も含む)の仮目録新規二一九件(所内非公開も含む、昨年度二六六件)、および一点目録新規六件(昨年度〇件)が登録された。また、一点目録の仮目録からの差替一〇件、仮目録の修正二八件、一点目録の修正一〇件を行った。

共同利用・共同研究拠点

二〇一〇年度より開始された「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」は、二〇二二年度より第三期を迎えることとなった。

拠点の活動としては、拠点が設定した課題について所外に広く共同研究者を公募する特定共同研究と、所外の研究者グループに対し研究課題の公募を行う一般共同研究のふたつの区分があり、各課題は東京大学史料編纂所協議会での審議を経て採択決定されている。本年度の協議会は、二〇二二年九月四日・二〇二三年三月九日(いずれも新型コロナウイルス感染症対策のためオンライン開催)の二回開催した。

二〇二二年度の特定共同研究は①古代史料領域「奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究―小川八幡神社大般若経を核として」(二〇二二～二〇二三年度)、②中世史料領域「賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究」(二〇二二～二〇二四年度)、③近世史料領域「史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化」(二〇二二年度)、④海外史料領域「本所所蔵

在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」(二〇二二～二〇二五年度)、⑤複合史料領域「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」(二〇二二～二〇二四年度)の五件であり、延べ人数にて四九名の所外研究者と二八名の所内研究者が参加した。

一般共同研究は二〇件の課題を採択し、延べ人数にて九三名の所外研究者と五二名の所内研究者が参加した。

本拠点共同研究では、大学や国立の研究機関のみならず、地方自治体の教育委員会・史料館・博物館・郷土資料館・図書館をはじめ、民間の研究機関や史料原本を所蔵している寺社や文庫などと連携して広く史料情報の収集・公開・研究を進めている。これにより多種多様な日本史史料の研究資源化を果たし、当該分野の研究の発展に資することを目的としている。二〇二二年度は、宮城・山形・茨城・栃木・東京・神奈川・長野・三重・富山・石川・福井・滋賀・京都・奈良・和歌山・兵庫・鳥取・岡山・広島・香川・徳島・福岡・長崎の各都府県および海外の大学・文化財関係諸機関、国立歴史民俗博物館・陽明文庫などと共同調査・研究を遂行した。

その成果については、オンラインで国際研究会・研究会を開催したほか、書籍として念仏寺・元興寺文化財研究所編『袋中上人と山の寺念仏寺』(なら文化交流機構、二〇二二年一〇月)、渋谷綾子・天野真志編『古文書の科学 料紙を複眼的に分析する』(文学通信、二〇二三年三月)や『東京大学史料編纂所研究成果報告』三冊を刊行した(終了分課題も含む)。また、博物館等展示として、特別展「きのくにの大般若経―わざわいをはらう経典」(二〇二二年四月三日～六月五日、和歌山県立博物館)、高野山金剛三昧院特別拝観(二〇二二年四月一〇日～八月三日)、特別展「兼好法師と徒然草―今解き明かす兼好法師の実像」(二〇二二年五月二七日～七月二四日、神奈川県立金沢文庫)、企画展「北条義時とその時代―武家政権確立への道」(二〇二二年七月二日～一〇月八日、鎌倉歴史文化交流館)、企画展示「山の寺」念仏寺と江戸時代の奈良町―絵師竹坊と「開化天皇陵」関係史料を中心に(二〇二二年一〇月一八日～二月三日、奈良市史料保存館)、特別展「法会への招待―「称名寺聖教・金沢文庫文書」から読み解く中世寺院の法会」(二〇二二年二月二日～二〇二三年一月二十九日、神奈川県立金

沢文庫)が開催され、展示や図録などにより共同研究の成果が周知された。このほか各共同研究課題の内容および成果の概要は、本誌「史料研究・成果公開」の「共同利用・共同研究拠点による研究」の項を参照されたい。

撮影による収集画像データの所在状況や、目録化による作成データは、本所データベースの「所蔵史料目録」[HiCAT Plus]「日本古文書ユニオンカタログ」にて公開している。史料画像については本所図書館閲覧室内の端末にて閲覧に供している。

なお、本拠点に関して、課題の概要、公募(課題・共同研究員)、研究会等の催しの案内、成果物の刊行など、随時本所ホームページ・ツイッターにて発信している。トップページからのリンク等で参照されたい。

IR・広報室

史料研究の成果を広く公開・発信することは史料編纂所の重要な目的・特徴のひとつであり、この機能を強化する必要がある。近年一段と求められるようになってきた。そのため、二〇一九年四月に「IR・広報室」を設置し、三名の室員を配置したが、二〇二二年四月よりさらに一名室員を増やし、四名の室員体制(平澤加奈子・IR・広報担当、Seifman, Travis・国際発信担当、三島暁子・編集担当、糸賀優理・IR・編集担当)としている。各担当の役割および二〇二二年度の業務詳細は以下の通りである。

〔IR・広報担当〕東京大学認定シニアURAとして、拠点研究活動の諸指標に基づく点検・評価を日常的に実施した。また、JSPS科学研究費補助金など、外部資金の獲得に向けた説明会を開催するなど、研究経費の多様化や研究環境整備に積極的に取り組み、研究活動の支援体制の強化を図った。また、全学のURA研修の講師やふちけんWGへの参加など、全学の認定URAネットワーク内においても積極的に活動を行った。二〇二一年一月より人文・社会科学系URAネットワーク幹事校(JINSHHA)に本学が参加しており、本学担当URAとしても活動した。活動の詳細は以下の通りである。

概算要求対応／学内第二次配分対応／二〇二二年度共同利用・共同研究拠

点実施状況報告書作成作業／外部資金獲得に向けた説明会開催／外部資金情報収集・提供／外部資金申請サポート／Researchmap代理登録作業／JSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業(以下データインフラ)運営サポート/DH2022運営サポート/プレスリリース対応/本部広報記事作成作業/取材対応/UTRAシンポジウム運営サポート/史料編纂所グッズ作成/UTCとの連携/東アジア史料編纂機関国際研究会運営サポート/本所広報関連問い合わせ対応

○会議等出席

〔所内〕研究企画委員会/財務企画小委員会/情報センター運営委員会/データインフラ関連会議/所報紀要委員会(拡大)/東アジア史料編纂機関国際研究会

〔所外〕URA連絡会議・UTRAシンポジウム・ふちけんWG/部局広報事務担当者連絡会/研究データの管理・利活用に関する検討WG

(学外)文部科学省学術審議会各種部会・専門委員会(研究環境基盤、研究費、人文科学・社会科学特別委員会など)/JINSHHAネットワーク関連研究会・シンポジウム/RUCコンソーシアム/RA協議会大会/内閣府科学技術政策担当大臣等政務三役と総合科学技術・イノベーション会議有識者議員との会合

〔国際発信担当〕各種広報の英文化につとめ、国際発信力の抜本的な強化を図った。

本所HP・Twitterへの英文作成・修正作業/本部提出書類の英文作成・修正作業

〔編集担当〕本所の年次発行物(東京大学史料編纂所報・同研究紀要・同要覧)の編集を担当し、成果公開の円滑化を図った。

『東京大学史料編纂所要覧(二〇二二年)(日本語版)』/『東京大学史料編纂所報』五七号/『東京大学史料編纂所研究紀要』三三三号

○会議等出席

〔所内〕所報紀要委員会

〔IR・編集担当〕本所の年次発行物(東京大学史料編纂所要覧)の編集を担当するとともに、所内の研究業績収集業務にあたった。

『東京大学史料編纂所要覧二〇二二年』（日本語版）／Researchmap 代理
登録作業／評価資料作成時の研究業績収集

図書部

史料編纂所は史料研究・編纂を進めるために、明治初年から現在にいたるまで、国内外日本史関係史料の調査・蒐集を続けてきた。

寄贈・移管・購入等によって受け入れた原本史料・写本は、国宝一件、重要文化財二〇件を含め、二〇万点を超える。また、各地に所蔵される史料を調査し、筆写・撮影をはじめとするさまざまな方法で複製を作成して、書庫に蓄積してきた。各種複製史料の数も、一八万件に及ぶ。また、日本史を中心に歴史関係の研究書・地方史・雑誌類を蒐集している。蓄積された図書・史料は閲覧室で公開されている。

史料編纂所図書部は、1 図書・史料の受入れと管理、2 史料のデジタル化と画像公開、3 所蔵史料の複製・掲載・放映申請及びその他の問合わせへの対応、4 所蔵史料の展示のための貸出し（出陳）、5 書庫及び閲覧室の管理などの業務によって、史料編纂所の研究事業および共同研究・共同利用拠点としての機能を支える役割を果たしている。

二〇二二年度には、引き続き新型コロナウイルス感染症に関する東京大学の指針に基づき、活動制限レベルに合わせて職員の出勤や所外者の閲覧を抑制したが、これまでに各種問合わせ・手続き等のオンライン化を進めるなど、可能な限りのサービスを模索し、また研究所としての研究・編纂事業に必要な業務を維持することに努めている。

閲覧室の利用については、引き続き予約制により所外からの入室予定者を把握し、効率的な運営と、活動制限の変更による状況変化等の情報の迅速な提供を図った。また、現状に合致するように史料・図書管理運用規程の内容や複製申請への対応方法を見直し、整備に努めている。

感染症拡大により多くの機関において史料の閲覧が制限されるなか、史料画像デジタル化の促進と公開の拡大はますます重要となっている。図書部では「史料画像デジタル化進捗管理システム」を用いて、所蔵マイクロフィルム

ムのスキヤニング画像、所蔵史料及び採訪調査等による所外史料のデジタル撮影画像の番号付与からサーバーへの登録までの一貫した管理を担っており、マイクロフィルムのスキヤニングや、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により、本所所蔵史料の新たな画像を所蔵史料目録データベースから公開している。

特に近年は人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業や大型科研の活動により、史料画像のデジタル化とデータ公開が急速に進展しており、図書部の史料情報担当者が各種協議に参加し、研究部と密接に連携して方針や手順に関する情報を共有することに努めている。また、公開環境が急激に変化しつつある状況のなか、史料採訪に協力いただいた史料所蔵者の個人情報に配慮し、その意向を尊重しつつ公開を進める方策について検討し、その結果をふまえた新たな運用を始めつつある。

一方、図書・史料現物の受入れと整理、蔵書点検、閲覧室の維持、史料及び書庫の管理・保全など、在宅では処理できない業務も多く存在する。

図書・史料の受入れについては、出動日数抑制の中でもほぼ順調に進んでいる。また、各地の博物館等への出陳についても再開し、件数・出陳史料数とも二〇二二年度と比較して約三倍に増えた。

史料の管理保全に関しては、スキヤニングや出陳と連動して、史料保存技術室と連携しつつ必要な修理・再装備・再配置等を行った。蔵書点検についても、日常業務と並行して柔軟な体制で必要な点検を実施している。

懸案である書庫の老朽化・狭隘化については、FSI事業「貴重史料の保全と研究資源化に関する研究基盤の強化」事業（二〇一九～二二年度）の予算配分を受けて改善を進めてきた。これに引き続き書架の配架状況や安全面の見直し、耐震対策の拡充などを行い、さらなる改善を図った。

現有の人的資源に限りがある一方、図書部に期待される業務は多様化しており、負担は過重となっている。効率化を進めつつ、業務内容の整理に努めている。史料編纂所図書部が果たす役割の重要性を研究者コミュニティおよび多様な利用者の方々に理解していただく努力を継続するとともに、所内の研究部・技術部・各センターとの連携をより緊密にし、課題を共有してゆくことが求められている。

以下、二〇二二年度の業務の遂行状況を述べることにする。

一 貴重書庫の温湿度管理

(一) 常時温湿度の監視を行い安定に努めている。特別資料庫（経済学研究科学術交流棟地下二階）は遠隔監視を行っている。

二 原本史料等の管理

(一) 未整理史料の整理を進めた。貴重書「五大虚空藏法勤修事（元応三年）」（〇〇一四一―一五）、「修史局以来残留書類目録」（〇一七〇―一八五）等一〇〇点の整理が終了した。特殊蒐書「原平三閔係史料」「平田国学者医師大武秀齋関係文書」の整理が終了した。

(二) 二〇一七年度より継続して、修理・撮影が完了した「往復」（史料編纂所の史料収集記録）を経済書庫に配架している。

(三) 新規受入史料、返却史料、寄託史料等の燻蒸を業者委託により実施した。

三 書庫内環境の整備、狭隘化対策

(一) 月に一回の書庫内環境整備・清掃を職員の手により実施している。

(二) 書庫一〜七層の空調機器（デシカ）は、不具合が発生する都度、業者に修理を依頼している。

(三) 九層の模写（軸装史料）を安全に保管するため、棚はめ込み箱を導入した。

(四) 書庫狭隘化対策の一環として、雑誌の移動作業を行った。

(五) 耐震対策として、二〇一九年度から書庫内書架に落下防止シートを設置している。これまで四〜五層・七層の設置が済んでおり、二〇二二年度は三層に設置した。

四 デジタル化への対応

(一) 本所所蔵史料の画像一四七八点（八四三六七コマ）について、所蔵史料目録データベースから公開を行った。

(二) 東京大学デジタルアーカイブズ構築事業「島津家本」のデジタル化により、二五三点（二七三四八コマ）の撮影・画像公開を行った。二〇二三年度も継続する。

(三) 四〇〇〇番台写本類については、二〇一九年度作成の指針に則り、所外において業者委託撮影を行った。撮影画像一九二点（二五一〇〇コマ）は二〇二二年度に所蔵史料目録データベースから公開予定である。

(四) サーバー（Archub）への画像のアップロードおよび簡易検索目録の作成を行った。画像のアップロード件数は次の通り。

① 国内探訪マイクロスキャニングデータ 四〇フォルダ 三二一四六コマ
② デジタル撮影データ 一七〇フォルダ 五六七三八コマ

(五) 探訪調査のデジタル撮影データ（二七七件）をEHCAT Plusに登録した。

五 業務の見直しと事務改善および利用サービス向上への取り組み
(一) 「東京大学史料編纂所史料・図書管理運用規程」を改正し、客員教授および客員准教授、研究所協議会委員の利用について明文化した。

(二) 模写の複製については、原本所蔵者の承諾書が必要なものを除き、用途を限定せずにデジタルデータで提供することも可とした。

(三) 所外利用者からの複製申請による新規撮影については、シートフィルム撮影からデジタルカメラでの撮影に切り替えた。

(四) 昨年度に引き続き、探訪活動等により所外史料から作成された複製物の利用条件を原本所蔵者と確認する方法について、WGに参加して協議を行った。

(五) 新型コロナウイルス感染症対応のため、所外者による図書室利用は引き続き完全予約制とし、閲覧席数・端末数の制限を行った。

(六) 二〇二〇年度以来実施を見送っている新任者へのガイダンスに代わるものとして、図書部ポータルサイトの図書室利用案内の整備や新入所員・研究員向けに配布する「図書室利用案内」（所内用）の改定を行った。

六 蔵書点検の実施

(一) 二〇二〇年度から耐震改修工事および新型コロナウイルス感染症の影響で変則日程となっていた蔵書点検を例年どおり四月に行うこととし、四月四日（月）〜八日（金）の五日間実施した。事前作業は日常業務と並行して行った。

(二) リストとの照合点検は、閲覧室の参考図書、書庫五層の特別参考図書、書庫六層の写本類（七〇〇〇架・IWAO・TOKOROを除く）と書庫

一層、三層の刊本について実施した。その他については、棚並びの点検、棚清掃を行った。

(三) 本年度の不明図書は七冊である。

七 受贈・受託・借用・出陳関連業務

(一) 受贈 二件 (関ともえ、新田一郎)

(二) 受託 新規一件 (湯原家文書)、更新一件 (本山家文書)

(三) 借用 三件 (慶応義塾大学三田メディアセンター、松尾大社、朝日町埋蔵文化財保存活用施設まいぶんKAN)

(四) 出陳三〇件、一四〇点 (東京国立博物館ほか)

八 利用・申請件数

(一) 所外来室者数 (一一四四名、うち当日利用者〇名) ※新型コロナウイルス感染症対応のため、二〇二二年度は当日利用受付なし。

学内者延べ三二八名、学外者延べ八二六名

史料・図書請求回数延べ一一二二回

(二) 文献複写件数

学内四三三件、学外七九六件、計一一三二件、三一五〇六枚

(三) 申請件数

① 翻刻・復刻 七件 一五五点

② 掲載 (印刷物・AV資料) 二九〇件 一〇四〇点

③ 放映 一六七件 三三六六件

④ 展示 (パネル等) 三五五件 六七七点

⑤ インターネット公開 七五件 一一二点

⑥ 複製 一五六件 三九三三点

(うち、デジタルデータでの提供 四六件 九九点)

九 視察・見学者のための案内・展示業務

書庫見学者総数 一二件 一〇四名

一〇 展示の手伝い・記録保管

木展、オープンキャンパス展示は、新型コロナウイルス感染症対応のため、昨年度と同様実施しなかった。

一一 新型コロナウイルス感染症対応

(一) 閲覧体制および業務体制

・ 開室時間短縮。

・ 完全予約制による閲覧。

・ 本学活動制限レベルに準じた学外者閲覧制限。

・ 在宅勤務の併用、時差出勤、積極的な年次有給休暇取得。

(二) 感染拡大防止対策

・ 閲覧室入口、書庫内、図書事務室に消毒液設置。

・ 開室、閉室準備作業における閲覧室内、書庫内消毒作業。

・ 閲覧カウンターに飛沫防止用パーテーション設置。

・ 閲覧席、閲覧用端末の減数、ソーシャルディスタンス確保。

・ 閲覧用端末、利用者用複写機にキーボード・タッチパネルカバー設置。

・ 閲覧室内、書庫内の筆記用具を撤去。

・ 図書室利用者に対する感染拡大防止対策の周知 (手指消毒、マスク着用、体調不良時の来室取りやめをお願い)。

・ 一部の利用者サービスをオンライン化。

・ 事務室内の「三密」を避ける工夫 (室内常時換気、事務室以外の作業スペース確保)。

史料保存技術室

史料保存技術室では、研究者と共に全国に散在する史料を調査・撮影し、歴史史料の複本作成や史料原本の保存修理に関する業務を行っている。これらの業務については、修理・模写・影写・写真それぞれの担当者から年度当初に活動計画が技術部運営委員会に提出され、委員会での検討の後に技術部長より教授会で報告された。

活動の詳細は、以下の通りである。

〔修理〕

○修理

海東諸国記 (S 貴三三・二) 一冊

一点

土御門文書(貴四・一)	一点
蜷川新右衛門親元自筆書状(貴〇一・二二六)	一点
長谷川守知宛徳川秀忠領地朱印状(貴〇五七二・二二)	一点
源頼朝下知状(S貴〇一・一三三)	一点
戸村文書	一点
福田文書	一点
正伝寺文書	一点
但馬伊達文書	一点
上野下司判形新券	一点
湖北五ヶ村文書	一点
名古屋温故會繪葉書帖 三帖	三点
東寺再興勸進文	一点
応仁大乱 一卷	一点
益永家文書	一点
風聴諸認(大武秀斎関係文書)	一点
織田信長朱印状	一点
園城寺文書	二点
織田信雄禁制	一点
北条義時書状	一点
松尾大社所蔵文書(八九〇九七号文書) 一卷	一点
松尾大社所蔵文書(池田庄立券文) 一卷	一点
陽明文庫所蔵「僧綱補任 下巻」一卷	一点
宇波西神社文書	一六点
湯原文書 九巻	九点
慶應義塾大学メディアセンター所蔵「山城国上野庄指図・坪付図・桂川用水図」	三点
高田屋嘉兵衛関係資料(絵図)	三点
幕末散兵訓練図(木版)	一点
織田信長画像(呂一)	一点
朝鮮国両王子并三臣誓約書(呂三四三)	一点

東山天皇御即位図(仁一〇三)	一点
○裏打	
古消息写(秀吉関連文書) 一冊	一点
往復書簡	五点
高野山奥之院拓本(三十六町石・後嵯峨院供養)	一〇点
拓本	一二点
○製本	
近衛家所領目録(影写本) 一冊	一点
往復書簡(紙縫綴じ直し)	一五点
正倉院御物	一点
○手当	
言経卿記 八巻(S貴四三・一・一八)	一点
東宮元服御膳図(正親町家本一六二)	一点
徳大寺公清公記(S〇〇七三・三)	一点
嶋陰集 一冊	一点
普賢延命	一点
○料紙調査	
入来院文書(S〇六七一・一八一・二・一七・一八)	一点
兵庫県多可町壽岳文章コレクシヨン	一点
○その他	
貸出対応(実隆公記・島津家文書「宝鑑」)	
状態確認(島津家文書)	
(高島晶彦・山口悟史)	
〈模写〉	
○摸写	
「東京国立博物館所蔵長篠合戦図屏風」色指定 第六幅 第七幅 第八幅	三点
○トレース図修正	
宇佐宮境内絵図 野仲郷絵図 善通寺絵図	三点

○図案制作

二〇二三年度要覧和文表紙

一点

○色料・表現等調査

菅浦与大浦下荘界絵図

一点

(村岡ゆかり)

〈影写〉

○影写

「中院一品記」(史料編纂所蔵) 卷二 紙背文書

二点

○筆跡調査

「中院一品記」(史料編纂所蔵)

「小川八幡神社大般若経」(和歌山県立博物館寄託)

「菅浦文書」(滋賀大学経済学部寄託)

「善通寺伽藍并寺領絵図」(善通寺宝物館所蔵)

○画像センタープロジェクト

電子くずし字字典データベース開発プロジェクトにおける、くずし字代表

字形の抽出作業および切り出し画像等の監修

花押彙纂等の画像データベース統合化プロジェクトにおける、花押彙纂・

花押カード・新花押の画像データの集積作業および切り出し画像等の監修

二〇二三四年

○その他

〈墨書業務〉

題箋・内題・奥書・扉書等

三点

(宮崎肇)

〈写真〉

○デジタル画像 撮影・画像処理等

東鑑 舊記雑録 御文書 醍醐寺史料 岩倉具視関係史料 上井覚兼日記

本所蔵貴重書 他

撮影数

三七七九カット

画像処理数

五八〇一九カット

(谷昭佳・高山さやか・桑田恵里)

①史料保存技術室主催講習会

毎年、所員を対象とした講習会を開催しているが、新型コロナウイルス感染症対策中という状況下のため、全体では中止とし、要望があれば個別で対応することとした。

②見学における制作実技および作品発表

国内外の来賓等の来所に際し、技術部として制作実技および作品発表を行った。なお、全室での対応の場合は室名を記していない。

二〇二二年五月一日 渋谷教育学園渋谷中学 (修理室)

計二一名

六月二九日 文部科学省 (修理室)

計三名

七月一日 上智大学 (修理室)

計三名

七月二五日 東京大学基金寄付者見学会 (修理室)

計一〇名

八月三日 東京女子大学 (修理室・影写室・写真室)

計一〇名

八月一日 神奈川県立横須賀高校 (修理室)

計三名

八月七日 リンナイ株式会社 (修理室)

計三名

一〇月一九日 本学文学部 (修理室)

計一五名

一月二〇日 韓国国史編纂委員会 (修理室)

計三名

一月二三日 日本大学芸術学部 (修理室・写真室)

計二五名

二月二日 明治大学文学部 (修理室)

計六名

二〇二三年三月九日 国立遺産研究所 (修理室・写真室)

計三名

外部資金一覽

科学研究費助成事業

撰閲家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究

研究種目 基盤研究(A)
 課題番号 一七H〇〇九二六
 研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度
 総額 〇万円

繰越額一九四万円

研究代表者 教授 尾上 陽介

出 統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創

研究種目 基盤研究(A)
 課題番号 一八H〇三五七六
 研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度
 総額 六三七万円

(直接経費四九〇万円、間接経費一四七万円)

繰越額二〇万円

研究代表者 准教授 山田 太造

日本中近世寺社〈記録〉論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研

究資源化
 研究種目 基盤研究(A)
 課題番号 一八H〇三五八三
 研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度
 総額 一三万円

(直接経費一〇万円、間接経費三万円)

繰越額四八万円

研究代表者 教授 遠藤 基郎

データ繋留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開

研究種目 基盤研究(A)
 課題番号 一九H〇〇五三三
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
 総額 一〇七九万円

(直接経費八三〇万円、間接経費二四九万円)

研究代表者 教授 山口 英男

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

研究種目 基盤研究(A)
 課題番号 一九H〇〇五三六
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
 総額 九八八万円

(直接経費七六〇万円、間接経費二二八万円)

研究代表者 教授 菊地 大樹

分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元

研究種目 基盤研究(A)
 課題番号 一九H〇〇五三七
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
 総額 三六四万円

(直接経費二八〇万円、間接経費八四万円)

「国際古文書料紙学」の確立

研究種目 基盤研究(A)
 課題番号 一九H〇〇五四九
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
 総額 一〇五三万円

研究代表者 教授 鶴田 啓

(直接経費八一〇万円、間接経費二四三万円)
繰越額九〇万八千円

研究代表者 特任助教 渋谷 綾子

コンテキストに応じた人文科学データベース化に関する研究

研究種目 基盤研究(A)

課題番号 二〇H〇〇〇一〇

研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度

総額 八七一万円

(直接経費六七〇万円、間接経費二〇二万円)

研究代表者 教授 山家 浩樹

筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との

統合による―

研究種目 基盤研究(A)

課題番号 二〇H〇〇〇二二

研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度

総額 七六七万円

(直接経費五九〇万円、間接経費一七七万円)

研究代表者 教授 末柄 豊

在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハ

ブ拠点の形成

研究種目 基盤研究(A)

課題番号 二〇H〇〇〇二三

研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度

総額 九六二万円

(直接経費七四〇万円、間接経費二二二万円)

研究代表者 名誉教授 保谷 徹

外交の世界史の再構築…一五～一九世紀ユーラシアにおける交易と政権によ

る保護・統制

研究種目 基盤研究(A)

課題番号 二一H〇四三五五

研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度
総額 八七一万円

(直接経費六七〇万円、間接経費二〇二万円)

研究代表者 教授 松方 冬子

断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史

科学構築研究

研究種目 基盤研究(A)

課題番号 二一H〇四三五六

研究期間 二〇二一年度～二〇二五年度

総額 一四八二万円

(直接経費二二四〇万円、間接経費三二二万円)

研究代表者 准教授 西田 友広

神社所蔵文書・社家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究

研究種目 基盤研究(A)

課題番号 二二H〇〇〇一五

研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度

総額 七八〇万円

(直接経費六〇〇万円、間接経費一八〇万円)

研究代表者 准教授 金子 拓

荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応

用研究

研究種目 基盤研究(A)

課題番号 二二H〇〇〇一六

研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度

総額 一〇七九万円

(直接経費八三〇万円、間接経費二四九万円)

研究代表者 准教授 井上 聡

明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新

研究種目 准教授 井上 聡

明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新

史料学の構築

研究種目 基盤研究(B)
 課題番号 一九H〇一三〇三
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
 総 額 一五六万円
 (直接経費一二〇万円、間接経費三六万円)

研究代表者 教授 箱石 大
 「原本史料情報解析」の方法による中世西国武家文書の研究と展開

研究種目 基盤研究(B)
 課題番号 二〇H〇一三〇七
 研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度
 総 額 四〇三万円
 (直接経費三二〇万円、間接経費九三万円)

研究代表者 教授 本郷 恵子
 近世書状史料群の研究と歴史情報資源化

研究種目 基盤研究(B)
 課題番号 二二H〇〇六九一
 研究期間 二〇二二年度～二〇二五年度
 総 額 八一九万円
 (直接経費六三〇万円、間接経費一八九万円)

研究代表者 准教授 松澤 克行
 日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて

研究種目 基盤研究(B)
 課題番号 二二H〇〇六九二
 研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度
 総 額 六三七万円
 (直接経費四九〇万円、間接経費一四七万円)

研究代表者 教授 杉本 史子
 日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察

研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二〇K〇〇九三三

研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度
 総 額 六五万円
 (直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 准教授 遠藤 珠紀
 公家法・公家家法・寺社法を中心とした中世法制史料の高度研究資源化

研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二〇K〇〇九五六
 研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度
 総 額 九一万円
 (直接経費七〇万円、間接経費二二万円)

研究代表者 准教授 前川 祐一郎
 東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―

研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二二K〇〇八三七
 研究期間 二〇二二年度～二〇二五年度
 総 額 一一七万円
 (直接経費九〇万円、間接経費二七万円)

研究代表者 准教授 稲田 奈津子
 徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―

研究種目 基盤研究(C)
 課題番号 二二K〇〇八七二
 研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度
 総 額 一六九万円
 (直接経費一三〇万円、間接経費三九万円)

研究代表者 准教授 及川 亘
 預人の政治的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 二二K〇〇八九一

研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度

総額 七八万円

(直接経費六〇万円、間接経費一八万円)

研究代表者 准教授 荒木 裕行

平安時代後期政治構造の史料学的研究

研究種目 若手研究

課題番号 一九K一三三三〇

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

総額 三九万円

(直接経費三〇万円、間接経費九万円)

研究代表者 助教 黒須 友里江

日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究

研究種目 若手研究

課題番号 二〇K一三二七二

研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度

総額 一〇四万円

(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 准教授 岡本 真

日本近世における政教関係の形成と確立

研究種目 若手研究

課題番号 二一K一三〇九〇

研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度

総額 七八万円

(直接経費六〇万円、間接経費一八万円)

研究代表者 助教 林 晃弘

諸社服忌令成立に関する研究―触穢観念の中近世的展開を視野に―

研究種目 若手研究

課題番号 二一K一三〇九一

研究期間 二〇二二年度～二〇二三年度

総額 三九万円

(直接経費三〇万円、間接経費九万円)

繰越額三五万円

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 小林 理恵

持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブシステム構築手法の開発

研究種目 若手研究

課題番号 二一K一八〇一四

研究期間 二〇二二年度～二〇二三年度

総額 九一万円

(直接経費七〇万円、間接経費二二万円)

研究代表者 助教 中村 覚

幕藩体制下における「御家」の存立構造

研究種目 特別研究員奨励費

課題番号 二〇J〇〇三〇七

研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度

総額 一〇四万円

(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

繰越額四三万六五六一円

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 根本 みなみ

日本中世後期における宗教勢力と社会転換―京都と北陸地域の関係を中心に

研究種目 特別研究員奨励費(外国人)

課題番号 二一F二一〇〇四

研究期間 二〇二二年度～二〇二三年度

総額 七〇万円

(直接経費七〇万円、間接経費〇円)

繰越額二〇万円

研究代表者 教授 榎原 雅治 (日本学術振興会外国人特別研究員 HUANG, Xiaolong)

近世後期の朝廷をめぐる政治文化の研究

研究種目 特別研究員奨励費(外国人)

課題番号 二二F二二三〇四
研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度
総額 六〇万円
(直接経費六〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 荒木 裕行 (日本学術振興会外国人特別
研究員 KIM, Hyungjin)

絵図の史学―「国土」・海洋認識と近世社会―

研究種目 研究成果公開促進費(学術図書)

課題番号 二一HP五〇六一

研究期間 二〇二二年度

総額 繰越額二二〇万円

研究代表者 教授 杉本 史子

古記録フルテキストデータベース

研究種目 研究成果公開促進費(データベース)

課題番号 二二HP八〇〇五

研究期間 二〇二二年度

総額 一七〇万円
(直接経費一七〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 准教授 遠藤 珠紀

○期間延長(新規の研究費の交付はなし)

一四世紀日本における紛争解決過程の変容に関する実証的研究

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 一六K〇三二五七

研究期間 二〇一六年度～二〇二二年度

研究代表者 准教授 渡邊 正男

中世後期日明関係の人的基盤の研究―「初渡集」「再渡集」を中心に

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 一七K〇三〇五八

研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

研究代表者 准教授 須田 牧子

漢籍書き入れの日本中世史料としての活用をめぐる研究

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 一七K〇三〇六〇

研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

研究代表者 准教授 川本 慎自

近世大名家臣史料の共同分析―多久家史料の読み直しを中心として―

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 一七K〇三〇九五

研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

研究代表者 教授 小宮 木代良

高精細デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板写真の史料学研究

研究種目 基盤研究(C)

課題番号 一九K〇〇九三四

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

研究代表者 技術専門職員 谷 昭佳

足利義満期武家政治史の研究―義満の権力確立過程の再検討を中心に―

研究種目 若手研究(B)

課題番号 一七K一三五二六

研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

研究代表者 助教 堀川 康史

近世における朝廷中枢による門跡統制の解明

研究種目 若手研究

課題番号 一九K一三三二九

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

研究代表者 助教 石津 裕之

IIIFとTEIを用いたオンライン翻刻支援システムの開発

研究種目 若手研究

課題番号 一九K二〇六二六

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

研究代表者 助教 中村 寛

鎌倉幕府法研究の再始動―書誌学的方法による基礎研究―

研究種目 研究活動スタート支援

課題番号 一九K二三二〇四

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

研究代表者 助教 木下 竜馬

サファヴィー朝との合意文書によるオランダ東インド会社外交文書編纂の研究

研究種目 研究活動スタート支援

課題番号 二〇K二二〇一二

研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度

研究代表者 助教 大東 敬典

受託研究

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

委託者 福岡市史編集委員会

研究期間 二〇二二年度

研究経費 八四万七千円

研究担当者 教授 山口 英男

准教授 岡本 真

賀茂別雷神社氏人発給文書の分析による氏人組織の研究

委託者 賀茂別雷神社

研究期間 二〇二二年度

研究経費 四五万五千円

研究担当者 准教授 金子 拓

人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業

委託者 独立行政法人日本学術振興会

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

研究経費 三一八五万円

研究担当者 教授 本郷 恵子

加速器科学総合育成事業加速器科学育成プログラム

委託者 大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構

研究期間 二〇二二年度

研究経費 六六万円

研究担当者 教授 本郷 恵子

寄付金

研究期間 二〇二二年度

受入件数 八件

受入金額 八五〇万円